

『後拾遺集』の詞書をめぐって 山之内 恵子

創作詩の増加する和歌史の中で、『後拾遺集』は、日常詠的な歌からしだいにその性格を文芸性の重視へと移行する過渡期に位置する。そこで、この中世和歌への構築をなした時期に対する多面的なアプローチの一環として、『後拾遺集』の詞書の特色について、三の私見を述べることにしたい。

『後拾遺集』の詞書は、全体的に長文であるという特徴がある。その長文な詞書の現状を把握する為、昭和五十一年十一月刊の糸井通浩・渡辺輝道編『後拾遺和歌集総索引』に拠ってその表記の長さを調査すると、次のような結果になった。

二行にわたるもの：21（春上）よみ人しらず・27加茂成助・29堀河右大臣ほか212首

三行にわたるもの：117（春上）能因法師・583（哀傷）一条院・720

（恋三）輔親・723（恋三）能宣・840（雑一）懐円・876

（雑一）小弁・922（雑二）顕綱・940（雑二）清少納言

・945（雑二）四条宰相・962（雑二）輔親・1007（雑三）

よみ人しらず・1061（雑四）輔親・1077（雑四）増基法師

・1091（雑四）後三條院・1116（雑五）伊勢大輔・1123（雑

五）長能・1155（雑五）兼明親王・1162（神祇）・1189（釈教）よみ人しらず・1205（誹諧歌）実方 以上20首

四行にわたるもの：649（恋一）・895（雑一）道綱母・1151（雑五）相模・1156（雑五）清少納言 以上4首

五行にわたるもの：1122（雑五）よみ人しらず
また、これら詞書表記の詳しい歌の各巻における分布状況をみると、二行の詞書二一五首中、四季歌二九、賀、別、羈旅、哀傷部四〇、恋部二四、雑部一二三首、三行のものでは、四季一、賀、別、羈旅、哀傷一、恋二、雑一六首で、四行の詞書は、恋一、雑三首で、五行では、雑一首である。

この分類から明らかに判明するように、雑部に詞書表記の長い歌が分布していることになる。ちなみにその比率は、雑部（一）六巻）全歌数三八八首中、一四二首に二行以上の詞書が付されていることになり、三六・六パーセントにのぼっている。この現象に関しては、後述することにして、先に掲げた長文の詞書の歌について考察してみたい。この際全歌について述べる紙幅の余裕がないので、ここでは四行以上の詞書歌を五首取りあげることにした（本文は

八代集抄本による。

四行にわたる69・恋一の、

加茂の祭の帰さに、前駆つかふまつれりけるに、青いろのひもおちて侍けるを、女の車より、からぎぬのひもときてとぢつけ侍けるを、尋ねさせけれど、誰ともしらでやみほけり。又の年のまつりの垣下にて斎院にまゐりて侍けるに、女のいづらつけしひもはと、おとづれて侍ければつかはしけるから衣むすびしひもはさしながらたもとはやくくちにし物をの歌は、650（よみ人しらず）との恋の贈答歌で、国歌大観本、八代集抄本には作者名は記されていない。しかし、糸井氏の前掲書に翻刻された宮内庁本によると実方朝臣の詠とあるが、本歌は能宣集（『私家集大成』中古I・117・119）に見え、その一本である書陵部蔵三十六人集の能宣集に付された詞書表記との類似点が多い。このような性格の贈答歌は、恋部で双方の詠作者をばかす場合もあり、この場合もそれに当らう。

また、同じく

母におくれ侍て、又の年のわざなど過て、つれづれに侍ける夕暮に、ちりつもりたることなど、おしのごひて、ひくとはなけれど、今はほどなど過にければ、折々ならしけるを、をばなりける人のあひ住けるかたより、琴のねきけば物ぞかなしき、などいひおこせて侍ける返事に読る 大納言道綱朝臣895なき人はおとづれもせでことをたちし月日ぞかへりにける

の歌は、『蜻蛉日記』「康保二年七月条一」の母の一周忌に琴をひき叔母と母とをしのぶという内容の中に見え、この記載部分を典拠にしたものと考えられる。それらの記述を比較検討してみると『後拾

遺集』の表記は、この日記の章段の内容を要約、整理し、簡潔にその作歌事情を記そうとした形跡を感じさせている。

入道一品宮に、人々まゐりて遊び侍けるに、式部卿敦貞のみこ、笛などをかしく吹侍ければ、かのみこのもとに侍ける人のもとに、又の日、よべの笛のをかかりよし、いひつかはしたりけるを、みこつたへきよて、思ふ事のかよふにや人もこそあれ、きよとがめける事など侍ける返事に 相模151いつか又こちくなるべきうぐひすのさへづりせめし夜半の笛竹は、相模の仕えた入道一品宮脩子内親王家の記録がこの詞書の資料となったものと思われ、次の雑五の、

陸奥守則光、くら人にて侍ける時、いもせなどいひつけて、かたらひ侍けるに、里へ出たらん程に、人々尋んにありかな告そといひて里にまかり出て侍けるを、人々せめてせうとなればしるらんと、あるはいかがすべきといひおこせて侍ける返事に、めをつゝみてつかはしたりければ、則光心も得て、いかにせよとあるぞと、まうできて問侍ければ、よめる

清少納言

1156 かづきするあまりのありかをそかなりとゆめいふなとやめくはせけん

の歌では、『枕草子』にその典拠を認められるが、この資料をそのまま用いた形跡はなく、表記上から撰者の何らかの作意をくみとることができるようである。

最も長い五行の詞書の付された雑五の、

中納言実成、宰相にて五節奉りけるに、いもうとの弘徽殿女御の御もとに侍ける人、かしづきに出たりけるを、中宮の御

かたの人々ほのかにきよく見ならしけんもゝしきを、かしづきにて見るらんほども哀と思ふらんといひて、はこのふたに、しろがねの扇にほうらいの山つくりなどして、さしぐしにひかげのかづらをむすびつけて、たき物をたて、文にこめて、かの女御の御方に侍ける人のもとよりとおぼしくて、左京のきみのもとにいはせて、果の日さしおかせける

よみ人しらず

112 おほかりしとよの宮人さしわけてしるき日かげをあはれとぞ見しでは、よみ人しらず歌となっているが、この歌が、家集や日記に見えるという根拠から紫式部の詠歌としている。しかし、『紫式部日記』中の表記とは相違し、本歌は『栄花物語』巻八「はつはな」と本集の記載が類似しているところからその資料的な関連性も認められよう。

以上のように、『後拾遺集』中、長文の詞書表記について考察してみると、その明らかな点は何らかの事情から作者名を伏せなければならなかった恋の歌などに、その間の実情を詳細に述べようとした意図のみられること、またその入集された個々の歌が、日記や物語といった散文学に典拠を求めたものが多くそれらを本集に入集させるに当って、撰者通俊はある程度は詞書表記の改変の必要性を感じたのであろう。

『後拾遺集』の特色でもある長文の詞書の意図するところは先に述べたが、それでは作者名があつてなお「題しらず」とした歌にはどのような意味が存するのか、この点について以下に述べてみよう。

このように詠作者は判明しているが、あえて「題しらず」としている歌は、本集中一〇六首、うち四季歌中では五二首、羈旅一首、

恋部一首、雑部一〇首である。明らかに四季歌と恋歌にそれが多く分布している。この現象は、先の特徴とも関連する問題としてもとらえなければならぬであろう。ある意味では、四季歌や恋部にこの「題しらず」が多いことは、詠作事情や周辺の状況などよりも、歌そのものの価値が見直されたのであり、恋部の題しらず歌には独詠歌が多い。時間や場、またその間の事情に限定されないうちかも歌が単独でその主張をとげているのは、ある意味での文芸性を語るものなのかも知れない。

では、あえて詳細な詞書を付さなかった四季歌や恋歌と反して、かなり積極的に詞書を記し、詠歌事情を明らかにしようとした羈旅、雑部に存する「題しらず」歌はどのような性格を有するものであろうか。

羈旅の題しらず歌は増基法師の、

512 けふばかりかすまさらなんあかで行みやこのやまはそれとだに見ん

で、この歌は『いほぬし』『遠江の日記』の部に見え第四句を「都の山を」とする。これには、「はるかにひえの山をみて、あすよりはかくれぬべし」という詞書があり、『後拾遺集』はこの『いほぬし』から採集したのであろう。とするとなぜ『後拾遺集』では題しらずとしたのであろうか。一般には典拠になった資料に詠作事情を示す詞書のなかった場合や、この増基法師の歌のようにあつてもそれほど有効性が認められなかった際に「題しらず」としたのではなからうか。

また、雑部には、一〇首の題しらず歌がある。そのうち雑一の巻頭歌で善滋為政の、

833としふればあれのみまさる宿の内にこころながくもすめる月かな

宇治忠信母

834月かげのいるををしむもくるしきに西には山のなからましかば

藤原爲時

835我ひとりながむとおもひし山里におもふことなき月もすみけりの三首は、それぞれが月を惜しむ気持を詠む。巻頭歌は荒れた家に誰も問う人がない。しかし月は昔と変わらず清く澄んでいるといった不変の月を詠み、834は月を惜しむ心を、835では思うことあって山居している身の上ではあるが、そんなこととはおかまいなしに澄みわたっている月を惜しむという主題で雑部の冒頭をかざる。この導入部の「題しらず」歌は、この雑部全体の底流にある人間の「あはれ」の思想と宗教観を独立した歌のみによって主調させ、全体の意味づけをする。

また雑二の巻末歌の元真と斎宮女御の、

970うき事もまだしら雲の山のはにかかるやつらきこゝろなるらん

971ふくかぜになびくあさは我なれやひとのこころの秋をしるらん
も「題しらず」で、この雑二の巻は男女間がかれがれになった嘆きや怨みの歌で構成され、この両首はその巻末に位置し、恋の観念的な状況に対する設定を必要としなかったであろう。以上に掲げたのはほんの一例にすぎないが、『後拾遺集』の「題しらず」は、資料的にその詠作事情が明確でないという実状から、しかたなく「題しらず」としたのでなく、歌自体の独立した有効性をねらった撰者の意図的な計らいが感じられるのである。

以上のように、人事的要素の強い雑部に長文の詞書分布が顕われ、その意味性の問われる部分である。

雑部は、四季部にもまた賀、別、羈旅部、恋部にも所属しない歌を取容した部立て、そのような部類からはみ出した歌とはいってもそれゆえにある種の自由さ、新しさを發揮できる巻でもある。またその雑歌も、自然を対象として働きかけ、そこから受ける心情の吐露を詠ずる四季歌と相違し、人間と人間の、また人間と社会との関係に於ける日常性の中から生じるものである。このように人間の精神史を詠う為、雑部は比較的生活色の濃い歌が集められたものと言えよう。それだけにその時代の風潮をよく反映しているとも考えられる。

古代和歌の終焉を迎え、中世和歌への橋渡しとしての『後拾遺集』が、雑部という極めて革新性の要求される部立てに、撰者である通俊の意欲的な撰集意識を看取することができる。物語文学の影響も当然ながら、できるだけ題しらずをさけ、その歌の成立事情を正確に、しかも詳しく具体的に述べようとした姿勢には、人間感情が多岐に渡って、歌そのものの持つ独立した文学性よりも雑歌という一つの抒情世界を形成しようとする試みとしての部分が充分受け取れるのである。

次に『後拾遺集』詞書のもう一つの特色として、詞書中に於ける「心を詠める」の語の問題を掲げることができる。この点に関して、既に井上宗雄^{註1}氏が、中古、中世和歌史上の一つの顕著な傾向である後拾遺、金葉集の詞書中の「心を詠める」に注目し、詳細で綿密な御論を展開されておられるので、それに譲りたいが、『後拾遺集』の詞書表記を一覧するとかかなり意識化された表記法を感じさせている。それは、『後拾遺集』という平安和歌史上の過渡期的な勅撰集として位置するという意味あいも含めて多に検討されるべき

であろう。

この六六例（糸井氏等前掲書）の「心を詠める」歌の詠作者は、

白河院 五首 (277・283・315・362・1051)

範永 四首 (23・372・373・456)

良暹 四首 (122・123・330・513)

師賢 四首 (3・233・326・836)

頼家 四首 (281・331・369・839)

能宣 三首 (96・163・1150)

の順で、能宣を除けばすべて当代歌人で、範永、頼家は和歌六人党の代表的歌人、良暹や師賢もこの六人党の彼らと親交のあった人間である。

また、井上氏の前掲論文にも触れられているが、『後拾遺集』の「心を詠める」に付随されている「春従東来」「春風夜芳」「水辺梅花」「柳掃池水」「遠花誰家」「遙聞時鳥」といった四字の漢字から成り、二つないしそれ以上の事柄を結合した題によって詠まれている歌は、範永、棟仲、頼実、兼長、経衡、頼家、義清、為仲らが構成した和歌六人党の歌人達が好んで詠んだ清澄な叙景歌にこのような題が多くみられる。このような題は、個人の山荘などで行なわれた歌会に詠まれ、ある種の限定された世界を卒直に捕え、心に感じたままを詠作するという態度は、ある種の気迫に満ちた世界を表現することになる。それが、平安和歌史上『後拾遺集』の序に言われる如く「しも」、後拾遺、金葉、詞花の時代は、古代和歌終焉に向かう衰亡の時代と言って良く、この時代はこのような和歌衰退の現実に醒めつつ古代和歌の伝統的世界として三代集を定直し、古今集伝統を基盤に中世和歌への形成をなした時代と言えるのではな

かるうか。そして、この期に特異な歌人集団である和歌六人党が出現し、その歌人達の詠歌態度が以上のような手段と方法で即応したのは興味深いことである。

漢語で構成された既にある美的世界を投影している題詠にさらに「心」という語が付加されるのは、現実との関わりの強い景物を「心」によって完結させ、一つの独立した創作詩の世界を形成する。「心」のもたらす情趣が、六人党の歌人等によって作り出され、古今集以来の常識的、伝統的な歌作態度からさらに新しい叙景歌をめざそうとした意欲的な姿勢が、『後拾遺集』の文芸性を形成してゆく胎動とも連なり、中世和歌史移行に伴う題詠の手法の確立期とも符号する現象としても扱いたい。

以上、『後拾遺集』の詞書の特色として、長文の詞書表記の問題、そして詞書中の「心を詠める」の題詠の問題の二点について述べた。次にはそれらを踏まえて、各巻に於ける詞書表記の特色と撰者の撰集意識を探ってみた。

本集二十巻を、おおまかに四季歌、賀、別、羈旅、哀傷部、恋部、雑部とに分類し、それぞれの部立中の詞書表記について述べることにする。

四季歌（春上下、夏、秋上下、冬）の詞書は比較的単純で明瞭なものが多く、題のテーマを卒直に表記したもの、詠作場所（歌会、歌合）をあわせて記した詞書などである。先述した特色の一つである「心」の語が詞書中に多いのもこの四季歌である。

次の賀、別、羈旅、哀傷部では、人事的な色彩の強い巻だけに長く詳しい詞書が付されていて、詞書表記中に人名の付された歌が多い。この巻に関しては、特に政治性の色彩が強いだけに配列構成も

かなり明確で一貫した意図のもとで行なわれたようである。そこにはおのずと詞書にできるだけその配列意識ののっとった意味を持たせる事が必要になってくる。そこで、詞書中に詠んだ理由と同時に誰の為に詠んだ歌なのかを明示する必要が生じた為であるうか。その現象は本巻に題しらず歌が三首であるという点からもうなずけるのではなからうか。

恋部四巻の詞書は、『古今集』の恋部と同様にほとんど詞書らしいものではなく、恋の経過に従っているようで、恋一、恋三にはやや詳しい詞書表記があり、恋二、恋四にはそれほど詳細な詞書表記のない点も興味深い。あくまでも恋という人間感情の陰影が投影される巻だけに、恋部四巻の個々の巻全体の色調を重視する傾向が強かったと言えるのではなからうか。

最後に、雑部の詞書については先に述べたが、「雑歌」という最も人間感情の介在する部立であるだけに、この巻数が急増した点やそれらの歌をかなり意識的に分類し、雑部の内部構成も整然としている点などから考えると、撰者通俊が個々の歌を配列させるに当り、詞書表記に対する意識も大きく働かせたことは明らか事実であろう。このような理由から長く詳細な詞書を施したのであろう。新しさを試みるがゆえにできるだけ本巻に対する批難をさげようとして、歌の成立事情を個々の歌に詳しく述べたといえるであらうか。

以上のように、各巻別にその詞書表記の特色をみてきた。『後拾遺集』の撰者である通俊はこうして四季歌や恋部には、できるだけ簡潔な詞書を付し、和歌が創作詩としての独立を目ざしてゆこうとする姿勢を感じさせ、またその反面、人事的で政教性の濃い賀、羈旅、別、哀傷巻や革新的な雑部に詳細な詞書を付したということは

四季歌などに見られる歌の趣の独立性が、そのおもしろさを捕えて『後拾遺集』の序に言う「ひとへにをかしき風体」を織りなす美的世界の構築へと、雑部の人間介在の人事的要素に高められた抒情世界への構築へと意味づけられて行くのである。そこに『後拾遺集』撰者が、詞書の記し方に関してもかなり苦労した跡が察せられるのである。

註1 「心を詠めるについて」（立教大学「日本文学」第三五号 昭和五一年二月）

「再び心を詠めるについて」（立教大学「日本文学」三九号 昭和五二年十二月十日）

註2 拙稿『後拾遺和歌集詞書人名索引』（『文芸論叢』十一号）
・昭和五十年三月刊